

# 近畿大学工学部 教職課程年報

2024

Vol. 11

■ 実践報告		
田中 広志:教職実践演習でのアクティブ・ラーニング教育の取り組み .....		3
■ 寄稿文		
藤井 寿久:卒業生便り .....		13
山岡 愛:中学校教諭免許を取得した理由 .....		19
■ 体験記		
教育実習報告      加藤 遼 / 三村 悠人 / 堤 美羽 .....		23
介護等体験報告      黄金井 健司 .....		26
■ 資料		
1. 令和5年度教職課程行事報告 .....		29
2. 令和5年度教職課程受講者数 .....		31
3. 令和5年度教育実習・介護等体験参加者数 .....		32
4. 令和5年度免許取得者数・教員就職者数 .....		33
お知らせ		
教職ラボ同好会(近畿大学工学部教職サークル) .....		37



# 実践報告



# 教職実践演習でのアクティブ・ラーニング教育の取り組み

田中 広志†

## Approaches to Active Learning Education in Exercises of Teaching Practice

Hiroshi TANAKA

教育の基礎的理解に関する科目等に配置されている教職実践演習の講義で2015年度より、アクティブ・ラーニングに関する講義を行っている。本実践報告では、教職実践演習でのこの取り組みについて学生からのリフレクションペーパーの回答をもとに考察する。なお本稿では文部科学省が使用している「アクティブ・ラーニング」と表記する。

### 1. 教職実践演習へのアクティブ・ラーニング教育導入の経緯

近畿大学工学部では、全6学科においていずれかの教員免許状の取得が可能となっている。教育の基礎的理解に関する科目等に配置されている教職実践演習は、本学部では4年生の後期に必修科目として設定されている。例年、履修者数は10数名から20数名程度である。著者は2015年度よりこの科目で1コマ分の講義を担当している（その他に2コマ分の教育実習報告会を複数教員で担当している）。その1コマ分でアクティブ・ラーニングに関する講義を現在まで行っている。この内容で講義を始めた経緯としては次のとおりである。2015年当時に著者は学内委員としてFD活動部門の委員を担当していた。その委員会業務の中でアクティブ・ラーニングに関する学部内調査を担当した。その際に、アクティブ・ラーニング型授業への取り組みについて知見を得ることができた。例えば文部科学省においては、[1]で中央教育審議会が2012年8月に大学教育の質的転換に向けてアクティブ・ラーニングに関する答申をしている。また同じく文部科学省は[2]で2014年11月に、初等中等教育に対してもアクティブ・ラーニングに関して中央教育審議会に諮問している。ところで、筆者は純粋数学の専門家であり、教育学の専門家ではない。本学工学部に赴任をして以来、数学科教育法などの教育学に関する講義を担当している。したがって、本来であれば数学もしくは数学教育に関する講義を行えばよいのであるが、履修者は数学教員免許取得者以外もいる。そのため、数学以外の内容でさまざま検討した結果、アクティブ・ラーニングに関する話題を取り入れてみることにしたというのが、この講義の経緯である。なお、教科及び教科の指導法に関する科目に配置されている解析学Ⅱの講義でもアクティブ・ラーニング型授業に取り組んでいて、それに関する内容は[3]で記載をした。

本実践報告では以下の内容で構成する。まず、講義内容の紹介を行う。次に2015年度のリフレクションペーパーの学生からの回答及びそれに関する考察を行う。その後、2015年

†近畿大学工学部教育推進センター

Center for the Advancement of Higher Education  
Faculty of Engineering, Kindai University

度の学生からの回答を踏まえた上で改善を行った 2017、2018 年度分の学生からの回答及びそれに関する考察を行う。ただし 2016 年度については、教職実践演習では他の担当をしたためアクティブ・ラーニングに関する講義は行っていない。

履修者は、2015 年度は 24 名、2017 年度は 24 名、2018 年度は 17 名（ただし 30 分以上遅刻した学生 1 名を除く）である。

## 2. 講義内容

講義では、主には学生たちに参考文献 [4] にあるようなアクティブ・ラーニング型授業をすることが可能である点を伝えている。アクティブ・ラーニング型授業は非常に大変な授業スタイルであると感じてしまうことがある。しかしながら実際には、アクティブ・ラーニング型授業をすること自体はそんなにも難しいものではないという印象を持ってもらい、積極的にこの授業スタイルを導入してもらいたいと思い、紹介している。

なお講義ではアクティブ・ラーニングとして、2つの定義を紹介した。1つ目は文部科学省による定義で [1] にある次のものを紹介した。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。」

2つ目は [5] にある次の定義を紹介した。

「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」

2つの定義を紹介はしたが、講義ではその後、[4] を使ってアクティブ・ラーニングについて詳しく見ていく関係上、[4] で定義として採用している [5] を主に使用した。

実際の講義内容は次のとおりである。まず、文部科学省の資料 [1]、[2] を参考にアクティブ・ラーニングが教育現場で導入されている背景について説明をする。次に、アクティブ・ラーニング及びアクティブ・ラーニング型授業の定義を紹介する。その際の定義としては [1] と [5] を引用している。その後、実際のアクティブ・ラーニング型授業の実践例を [4] を参考に紹介をする。その上で、実際にアクティブ・ラーニング型授業を体験してもらう。最後に残りの時間で学生たちにリフレクションペーパーに記入してもらう。アクティブ・ラーニング型授業に使用した題材は [4] で紹介されているコンセンサスゲーム「月世界で遭難（NASA ゲーム）」である。[6] で配布されているワークシートをもとに実際のアクティブ・ラーニング型授業を学生に体験してもらい、アクティブ・ラーニングの良さを感じてもらおうようにしている。

## 3. リフレクションペーパーの学生回答（2015 年度分）

リフレクションペーパーは講義の最後に、記名の自由記述式で 4 項目に関して回答してもらっている。2015 年度のリフレクションペーパーの内容と学生の回答は表 1 に記載した。

学生の回答は質問項目ごとに履修者 24 人から 3 人ずつ選んで記載した。なお質問項目 1 については、講義中に紹介した [1] や [5] の定義をほぼそのまま記入してあるものも多かったが、その回答については表 1 では省略した。

2015 年度分のリフレクションペーパーの学生回答より、この講義内容は好評であることが分かった。アクティブ・ラーニングという用語について全く聞いたことがないという学生はほとんどいなかった。しかしながら、十分な知識を持っていたわけではなかったため、この内容で理解を深めてもらえたことから意義が確認できた。特に定義自体をほとんどの学生は知らなかった。その一方で、実際にアクティブ・ラーニング型授業を自分が行うことは非常に大変そうだという回答が多くあった。例えば、所定の内容量を終わらせるのに時間がかかるや教員の準備が大変などの意見があった。今回の講義では、アクティブ・ラーニング型授業を学生自らに積極的に行ってもらおうというのが目的であった。そのため、困難さについてはあまり講義では触れていなかったが、それでもそのように学生は感じてしまい、アクティブ・ラーニング型授業を行うことにためらいが見られた。この点については、次年度以降に改善する必要がある。そのため、次年度以降は例えば [4] で指摘されているように、所定の内容量を終わらせるのに時間がかかることについては授業に ICT 機器を取り入れることで解決できることがある点や、教員の準備の大変さについては問題集や参考書を活用することで解決できることがある点などを強調する必要がある。また 2015 年度はコンセンサスゲームにおいて、自分一人で考えた回答と、グループで考えた回答とで、どちらが良い結果になったか学生に質問したところ、自分一人で考えた回答の方が良い結果になったという学生の方が多かった。その結果もアクティブ・ラーニング型授業を導入することに学生がためらう結果の要因になったのかと感じられた。

表 1 リフレクションペーパーの学生回答 (2015 年度)

1. アクティブ・ラーニングとは何ですか。

(学生回答)

- 先生から生徒に一方通行でなくグループワークや質問等様々な方法がある。定義が様々ある。
- 教師から一方的に話をするのではなく、生徒を当てたりして生徒自身に考えさせるようにすること。また、生徒同士で話し合ったりして、生徒の考えを深めたり、意見を交換しながら学ぶこと。
- アクティブ・ラーニングとは、今まで教師が主体となってきた詰め込み学習とは違い、生徒が主体となって学習を進めていくこと。

2. アクティブ・ラーニングの良い点を書いてください。

(学生回答)

- グループワークとして取り入れると普段は授業に発言しないような生徒も、積極的に発言をする環境が作れると感じた。生徒が自ら学習するため、考える力もつくと思う。
- アクティブ・ラーニングをしていなかった今までの授業では、生徒が暇になったりして、居眠りしたり、内職をしたりして、授業に積極的に参加しようという姿勢が見られない。これを行うことで、生徒間同士で教えあうことにより、知識の身に付き具合も大分良くなったりし生徒間同士の競争力も上がり、相乗効果も期待できると思いました。
- 学習定着度が高い（講義を受けるだけよりも）。生徒たちが意見を交わしあうことでさらに身につく。また、教えあうことで自分のためになる。ディスカッションをするに進むのが遅くなると思いがちだが、教える要点を絞ることで逆に効率が上がり、結果的によりはやく履修を終えることができる。

3. アクティブ・ラーニングを行う上での困難な点を考えてください。

(学生回答)

- 授業の中でグループワーク等を取り入れると、一般的な授業と比べてグループで議論をする時間が加わるため時間が足りなくなる。それに対し、しっかりと内容を網羅させないといけないため、生徒の家庭学習の時間を増やすことになる。これは教師へと生徒の両者の負担を増やすことになる。
- 時間がかかる。良いアイデアを出しても、みんなが聞きまちがえてしまったり、それは役に立たないとあっさり切り捨てる可能性がある。多数決で意見が決まる恐れがある。
- 時間が足りない。現行の入試制度に対応できない。教師への負担が大きい。学力が測りづらい。話す生徒、話さない生徒の二極化。

4. この授業の感想を書いてください。

(学生回答)

- アクティブ・ラーニングという言葉は聞いたことがあったが、実際にどのような授業であるのかということか知らなかったのが、たいへんよい経験ができた。次に授業するキカイがあるのであれば、このアクティブ・ラーニングを少しとり入れてききたいと思います。また、最後のゲーム形式のアクティブ・ラーニングはとてもよかったです。
- NASA 問題について、考え方が異なる人と話し合う場合、どちらも自分の意見が正し

いと思っているので考えをまとめることはとても難しいと思いました。アクティブ・ラーニングはこれからの教育を考える上で教師が身につけなければならないスキルだと思うので、授業計画をする場合にアクティブ・ラーニングを取り入れていきたいと思います。話し合いを行うのはとても楽しいです。

- 近年注目されているアクティブ・ラーニングをしてみて、とても楽しかったです。生徒達もそう感じてもらえるのではないかと思います。しかし、実際に指導者として取り入れるとしたらなかなか難しい手法ではないかなと思いました。大学生の私たちにさえ時間内に終わらず延長していたため、授業時間内に生徒にさせるのは厳しそうだなと思いました。

#### 4. リフレクションペーパーの学生回答（2017、2018年度分）

2016年度はこの講義形式の講義を行っていないため、2017、2018年度のリフレクションペーパーの内容と学生の回答を表2に記載した。履修者は、2017年度は24名、2018年度は17名（ただし30分以上遅刻した学生1名を除く）である。学生の回答は各質問項目に関して、年度ごとに数名選んで記載した。なお質問項目1については、2015年度と同様に講義中に紹介した[1]や[5]の定義をほぼそのまま記入してあるものも多かったが、その回答については表2では省略した。講義形式などは2015年度と同じであるが、2015年度分のリフレクションペーパーの学生回答で記述したように、2017、2018年度はアクティブ・ラーニング型授業を行う上での困難さの解消について強調しながら、講義を行った。なお、学生の回答にあるALはアクティブ・ラーニングの略である。

2017、2018年度分のリフレクションペーパーの学生回答より、2015年度と同様にこの講義内容は好評であることが分かった。また2015年度と同様に多くの学生は定義など十分な知識を持っていたわけではなかった。その一方で、教育実習でアクティブ・ラーニングについて学び、アクティブ・ラーニング型授業を実践していた学生も1名いた。2015年度の学生の回答にあった、所定の内容量を終わらせるのに時間がかかるや教員の準備が大変などの意見はほぼなくなった。代わりに、コミュニケーション能力が低い生徒への対応や、話し合いがただのおしゃべりになってしまわないかという困難さが指摘されていた。また、2017年度の履修者24人中、自分一人で考えた回答とグループで考えた回答とで比較したときに、グループで考えた回答の方が良くなった学生は19人であった。同様に2018年度では履修者17人中、グループで考えた回答の方が良くなった学生は17人で全員であった（ただし30分以上遅刻した学生1名を除く）。その結果とも相まってアクティブ・ラーニング型授業の有用性を認識した学生の回答が多かった。また積極的にアクティブ・ラーニング型授業を行いたいという学生も増えていた。なお2018年度のみ2名ほどの学生が、コンセンサスゲーム「月世界で遭難（NASAゲーム）」を今回の講義以前に経験していた。

表2 リフレクションペーパーの学生回答（2017年度，2018年度）

1. アクティブ・ラーニングとは何ですか。

（学生回答）

- 先生だけが説明だけをして進める授業ではなく生徒に当てさせたり，グループ討議を行うことでより定着度を高める。（2017年度）
- 主体的対話的深い学びのことである。生徒主体で行われる授業のことで理解することを大きな目的としている。（2017年度）
- 教師ではなく，生徒が主体的になり，授業を行うこと。生徒同士の教え合いが重要になる。（2018年度）
- 主体的で対話的な深い学びのことで，生徒が主体となって教え合いコミュニケーションを図りながら学習をしていく授業の形のこと。先生は説明を最低限におさえ，生徒同士の考える時間を多く取ってやる必要がある。先生の発問に対し，生徒が答えるだけでも広い意味ではアクティブ・ラーニングであるといえる。（2018年度）

2. アクティブ・ラーニングの良い点を書いてください。

（学生回答）

- 発言しやすい雰囲気づくりができる。気づきを得やすい。（2017年度）
- 勉強だけでなくコミュニケーション力も必要になるので生きる力にもつながり，また，クラス作りにもなる。一人でやるより仲間と協力して何かを達成することにより，自己肯定感もあがり，より深い理解につながる。（2017年度）
- 班で考えることでわからない生徒に教えあうこと協力することができる。また理解できている生徒も教え方を上手くしていくためにより理解を深めていく。（2017年度）
- ただ聞くだけの授業よりも定着率が高くなる。板書等の量が少なくなり，授業進行をスムーズに出来る。（2018年度）
- グループワークでは1人ではよい考えが出ていなくても他の人の意見からよいアイデアが出たり教えてもらえたりすることができる。（2018年度）

3. アクティブ・ラーニングを行う上での困難な点を考えてください。

（学生回答）

- 話し合いを授業にとり入れたりしても，クラスによっては話し合いがただのしゃべりの時間だけになったりするなど一概にすべてのクラスなどで通じる100%のものではないから。（2017年度）
- 適度な支援をどこまでするか難しい。クラスの雰囲気作りが重要なので，現在いじめがあるクラスでは難しいのではないか。（2017年度）

- 話しをする事が苦手な生徒や、コミュニケーション能力の低い生徒が、アクティブ・ラーニングを行うことがしづらい。授業に対し、やる気のない生徒は、より学習がしづらくなる。(2017年度)
- 形式、スキルの縛りが無いので良くもわるくも教師しだい。学校のレベルによってALのレベルもかわる。→それを見きわめなければいけない。(2018年度)
- 生徒理解が必要であると考えられる。生徒の授業態度や個々の学習発達具合によっては、学習させる上でのアクティブ・ラーニングの手法を適応に変化させていく必要がある。先生の説明を短くするため、間違っただけの内容理解を招きやすい側面もある。(2018年度)

#### 4. この授業の感想を書いてください。

(学生回答)

- 教育実習でALを学び、実践してみて、自分の生徒時との違いにおどろきました。生徒からの感想も理解が深まる楽しいといった声が多く、とても興味がわき、色んな人の本を読みはじめました。今回の小林先生の例もとても参考になりました。これからの自分の授業にもとりいれていきたいと思えます。(2017年度)
- アクティブ・ラーニングは重要であることが分かった。困難な点もあるが良い点も多くあるので、積極的に行うようにしたい。コンセンサスゲームは簡単にできて、良いと思った。(2017年度)
- コンセンサスゲームが楽しかったです。自分の持っていない知識を得ることで、納得して班の答えを考えることができたと思う。教育実習ではたくさんの活動を取り入れたと思うが、目的をきちんときめて、するときとしなかったときの効果のちがいを知ってみたいと思った。(2017年度)
- アクティブ・ラーニングをやりたいと思った。難しいこともあるけど挑戦してみたい。コンセンサスゲームをして、楽しく遊び感覚でしたのに、「協力すること、話し合うこと」の大切さにつながっていると聞くと、とっても納得できて、驚いた。「聞くよりやってみる方が理解できる」ということがより体感できた。(2017年度)
- 自分で考えるよりも他の方の意見を聞くことで納得できるし、更なる考えができた。このように思うことで、生徒たちも授業や勉強が楽しくなり、意欲的にやると思うので、アクティブ・ラーニングは積極的に取り組んでいくべきだと思う。(2018年度)
- コンセンサスゲームをして実際に1人で考えるより多数で考えたほうがいろいろな見方の意見が出てとても考えが深まったのでアクティブ・ラーニングはとても有効なんじゃないかと感じました。(2018年度)

#### 5. おわりに

教職実践演習は4年生向けの科目であるため、学生はグループ活動によく慣れている。よ

ってアイスブレイクなどの時間をとる必要がない。そのため、1 コマの講義で今回の内容量が可能である。低学年向けに行う場合は時間配分を変える必要があると思われる。

筆者は数学の専門家であり、教育学の専門家ではない。そのため以前、教育の基礎的理解に関する科目等に配置されている教育実習特講という 3 年生向けの必修科目で数学の内容を中心とした講義を行ったことがある。しかしながら、この講義内容は数学教員を目指す学生には好評であった一方で、それ以外の学生には大変不評であった。そのようなこともあり、今回のような内容の講義を行うことを決めたという経緯がある。それに比べると、このアクティブ・ラーニングに関する講義は、学生たちの満足度も非常に高かった。今後も学生たちの意見を生かしながら、講義運営の改善を図っていきたい。教育学の専門家ではないものがこのような講義を担当することは大変なことだと思う。教育学以外を専門にする他の教員の参考文献になれば幸いである。

## 6. 参考文献

- [1] 文部科学省 (2012), 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)
- [2] 文部科学省 (2014), 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm)
- [3] 田中 広志 (2022), 「数学科目でのゼミ形式の講義の効果」, 近畿大学工学部教職課程年報 Vol. 9, pp. 3-7
- [4] 小林 昭文 (2015), 『アクティブラーニング入門 ―アクティブラーニングが授業と生徒を変える―』, 産業能率大学出版部
- [5] 溝上 慎一 (2014), 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』, 東信堂
- [6] 小林 昭文 (2011), 授業研究 AL&AL, <https://a2011.hatenablog.com/entry/20110507/p1>

# 寄稿文



## 卒業生便り

藤井 寿久

近畿大学附属広島高等学校・中学校福山校 校長

私は、近畿大学工学部工業化学科を昭和 56 年に卒業した、藤井寿久（フジイ カズヒサ）と申します。皆さんの先輩にあたる近畿大学の同窓生です。

この度、教職課程を専攻しこれから教員を目指す皆さんに対し「何か参考になることや励ましの言葉を戴きたい」との依頼がありました。しかしながらこんな私に、皆さんにとって有益なお話はありませんから、私がなぜ教員を目指したのか？また、なぜ今日まで教員をやっていたのか？など、これまでの私の教職としての経験・体験談を書かせていただこうと思います。

まずもって私は、中学校、高校時代に「教員になりたい」なんて、考えたことは 1 度もありませんでした。私は小学校から高校まで広島県中部の山間部でごく普通の地域の公立学校で少人数（小学校 22 人学年 1 クラス、中学校 45 人学年 1 クラス、高校は学年 5 クラスの高校）の中で楽しく学校生活やクラブ活動（中学校では卓球部、高校では軟式野球部、大学ではソフトテニス部に所属）をしていました。高校は普通科ではありましたがクラスの中で大体 6 割が進学、4 割が就職だったので授業もそれなりに気楽？に受けていましたが、2 クラス 90 人の中には国公立に 2～3 人、私立大学に 30～40 人程度、後は就職、公務員組と、いろんな生徒と一緒に授業を受けていました。みんな仲がよくて、今で言う「いじめ」とか「不登校」といった問題は殆ど無かったように思います。それが証拠に未だに 4～5 年おきに定期的にクラス会をしています。出席率はかなり高いと思います。

その当時の私の先生に対する印象は「先生ってよくされるなあ。生徒は言うことを聞かないし、反抗するやつもいるし。勉強はあまりせず、授業中寝ているやつもいる。先生ってたいへんだなあ、何が楽しくて先生をされているのかなあ」と憧れ等はありませんでした。ただ、なぜか私は多くの先生から声をかけられ可愛がってもらっているとの感じはあって、多くの先生に対して私は、尊敬の念を抱いていました。

高校時代の私の進路希望は「早く就職して働きお金を稼ぎ、いい車に乗りたいな」くらいの漠然とした考えと、我が家の家業は 3 代続いた「建築業（大工）」だったので、私も将来は建築業に携わるのかな？建築の道に進んで 4 代目となれば、父や祖父は喜んでくれるのだろうか？と軽い考えしか持ち合わせていませんでした。従って「絶対に建築の道へ進むんだ」という強い希望も無かったのも、事実です。

高校 3 年になりいよいよ進路を決めるころになって、担任の先生（20 代後半の若手で兄貴のような存在）が急に我が家を家庭訪問されました。目的は両親だけでなく祖父母にまで会い「この寿久を大学に行かせてやってください。これからの時代は、大学を卒業した方が絶対

に有利になる時代となります」と我が家まで 20 km の道のりを、夜遅くに頼みに来られました。

私はそれまで「大学に行きたいとか、親に反対されている」なんて言ったことはないので、担任の先生の熱心な働き掛けに正直びっくりしたのを思い出します。

私は 4 人兄弟の長男であり父母は高校に行っておらず、父は手に職（大工）をつけるため腕のある建築業の棟梁のところに弟子入りし、毎日、真面目に一生懸命働いていました。朝、日が昇ると家畜（和牛）へのえさのための草刈り、夕方は大工の仕事が終わって家に帰るやいなや日が暮れるまで、家の農家の仕事を手伝っていました。母は祖父母と共に農家の嫁として朝から晩まで働いていました。水稲、葉タバコ、こんにゃくの野良仕事と山林の芝刈りなど、これまた日が昇り、日が沈むまで一生懸命働いていました。私たち兄妹 4 人は日が暮れてお腹が減っても、大人が家に入るまで夕食は食べられませんでした。しかし文句ひとつ言わず喧嘩もせず、兄弟仲良く待っていたように思います。そんな家庭、両親だったので私を含めて 4 人の子どもに「勉強しなさい！」とか言われたことは一度もありませんでした。

そんな田舎では普通の家庭の状況で育った私に、担任の先生は熱心に大学進学を勧めたことは不思議にさえ思いましたが、ついには家族も折れ私に大学に行っても良い、と受験をさせてもらえることになりました。

しかしながら、3 年生の夏までこれといった受験勉強はしておらず（クラブ活動は最後まで一生懸命やりきりましたけど…）どこを受験すればいいのか、大学の状況もあまり分からない状況でもありました。両親からの条件は「大学に行くなら県内の大学（理由は遠くに行ったら帰って来なくなるし、お金もかかるので）へ、4 人兄妹なので大学に行くのはお前だけ。あとの 3 人は高校まで」等と条件を出しました。私は将来は実家に戻る考えだったので、その点だけは一致していました。ただ、大学選びでは県内の大学、また自分は理系だったので一番に思い浮かぶのは広島大学、しかし受験勉強もろくにしていないので、広島大学は到底無理。よってその他の県内の理系の大学といえば当時は、広島工業大学と近畿大学工学部でした。当時の私のイメージでは広島工大の方がなんとなくおしゃれで少しばかりレベルも高く、近大のイメージはなぜかあまり良くありませんでした。

すると当時、物理の教科担当だったベテランの先生が、私のことをどこからか聞きつけ「藤井は近大に行きなさい」と強く勧められたのです。その理由として「近大は今後、伸びる大学だ。今でも知名度だけは全国レベルなので名前だけは知れ渡っている大きな大学だ。だから近大を出た方が将来、必ず自分のためになるはずだ」と強く勧められました。その物理の先生は普通の授業では物静かな控えめな先生で、私からそんなに親しく話をさせて頂いた訳でもないし、こちらから進路相談した訳でも無いのにその時ばかりは強く説得されました。しかし今となって思えば、その物理の先生の推しがなかったら近畿大学に入学していなかったように思うし、実際、近畿大学を卒業したからこそ今日の私があるのだと思うので、この物理の先生には本当に感謝しています。

そうして私は、近畿大学工学部工業化学科に何とか合格し、漠然と考えていた建築関係へ

の道は断念することになりました。実際、建築ではなく化学関係に進みましたが以前から父は私に「お前には、建築のセンスがあまり無い。巧者が無く体力も無い」と冗談半分(?)でよく聞かされていたので、父は化学関係に進むことには特に反対はしませんでした。

ただ私のモットーとして「何でも目の前にあるものに一生懸命取り組むこと。これは神様がこれをしなさい、と与えてくれているのだ。頑張っていれば何かいいことに必ず繋がるはず。家庭も決して裕福でないのによく自分を大学に行かせてくれた。有難いことだ。化学関係で頑張ろう」と自分で自分を慰め、奮い立たせていました。私立の理系といえば授業料も高いので、「あとの兄妹の分も頑張らなくてはならない。絶対に4年で卒業するぞ」と決意して大学に進学しました。自分で言うのもおこがましいですが大学では自分なりに目いっぱい勉強したと思います。授業は真面目に受け、試験期間中は早めに準備して死に物狂い(少しオーバーかな?)でやったように思います。そうしたことで成績も伴い始め、周りの友人からは「藤井はできるやつ」と噂が立ち始め、いい意味でのレッテルを貼られるようになりました。そうなってくると自分自身もそれが良いプレッシャーや自信にもなり「ワシはやればできるのだ!」と、さらに頑張れる自分の支えにもなったように思います。

また、私立大学で理系学部はお金がかかるので「大学ではクラブに入らずバイトをして少しでも親の負担を少なくしよう」と考えていたのですが、大学生生活も2~3週間近くたった中でふと放課後のグラウンドに目をやると、汗びっしょりになってサッカーボールを蹴っている同じクラスの友人を見つけました。この様子を見ると「やっぱり自分は今までも体を動かし、ストレスも発散しながら学校生活を送ることで多くの友人とも出会えた。大学でも運動を続けたい、と親にも相談しクラブの費用(道具代や遠征費)は週末(金・土)の夜の居酒屋でのバイトで捻出する。また節約生活もするのでクラブをやらせて欲しい」とお願いし、以前から興味があったソフトテニス部に入りました。すると良き先輩、良き同級生にも恵まれ、クラブ活動を通じて多くの社会経験をさせて頂き、学生生活は充実した楽しいものになりました。このように大学に行かせてもらい、クラブ活動もさせてもらった親への感謝は更に深まり「このお礼は大学卒業後に必ず返す」と自分にもいつも言い聞かせることとなり、これもまた私の一生の財産となったように思います。

大学生生活も3年生に近づくと、就職について考え始めるようになりました。その頃、工業化学科で「教職課程を履修すれば理科の教員免許が取れる」ということを知りました。理科の教員には特に興味は無かったのですが「今は、資格の時代なので取れるものは積極的に取っておこう」と、教職課程を履修しました。

そして4年生の6月に2週間の教育実習があり、私は地元の出身中学校に行きました。その頃の出身中学校は、私が通っていたころよりさらに生徒は減り、3学年とも1クラス、クラス人数は20数名でした。するとそこでの2週間の教育実習が自分の予想に反して本当に楽しくて充実しており、生徒達は「藤井先生の授業は分かり易い。上手。板書もきれい」と褒めてくれるし、たくさん生徒が話しかけてくれました。また、校内の12~13名の先生方は全員、校長先生から養護の先生まで全員がお一人ずつ時間を取ってくださり、マンツーマンでそれぞれの

教職員の立場で面談し、いろんな話をしてくださいました。その面談の中でも「藤井先生って本当に教壇に立つのは初めてなんですか？理科が分からない私でもよく理解できました」等と驚かれ、褒められました。人間、褒められると悪い気はしないもので、その教育実習で初めて「これはひょっとして自分は教員に向いているのかな？教員って面白そう」と考え始めました。さらに、放課後のクラブ活動（軟式野球部やソフトテニス部）の指導もとても楽しく、自分がクラブをやってきたことがここで活かされ、それぞれのクラブ指導も実技を見せながら指導できました。テニスコートで中学生とラリーをするのもとても楽しく「自分は将来教員になって、クラブ指導がしたい」と、この2週間の教育実習で教員という将来の目標が決まりました。

実はそれまで福山市内の化学関係の企業訪問をしており3件の就職内定をもらっていたのですが、それらをすべて断り、教員の道一本で再び就活をすることに決めました。

大学卒業後は、田舎の実家に帰ることを決めていたので、実家から通勤範囲（1時間程度）である福山市内の私立高校を廻りました。その様子を大学の研究室の教授先生やソフトテニス部の顧問の先生、また何回かお世話になった養護教諭の先生らにお話しして相談したところ、みんなこぞって「福山には近大附属福山があるよね。近畿大学は今後さらに伸びる大学だ。公立の先生は公務員なので、あまり思うようなことが出来ず、限られた条件の中でしか教育活動ができないし、転勤もある。しかし私学（近大福山）は違う。藤井君は先生に向いている。だから絶対に近大福山の教員になり、そこで活躍しなさい」と同様なアドバイスをしてくださいました。

当時私は、近大福山についてはあまりよく知りませんでした。聞くところによると、以前は別の私立高校であり、当時の10年ほど前に近畿大学附属に移管されたとのこと。当時は男子校でやんちゃが多いとの情報もあり、これまた正直あまり気が進みませんでした。しかし、たまたま理科の教員の空きもあり最初は非常勤講師として採用され、実家の田舎から片道60分かけて往復140kmを毎日通いました。

教壇に立つと確かに男子校でやんちゃが多く噂どおりでした。しかし校内では良く締めてあった(?)ので、授業中騒いだり困ったりすることはなく決して荒れた学校ではありませんでした。けれども勉強はしない(できない?)し、こちらが言うことはそう簡単には聞いてくれない。若いのでなめられているのか?「やっぱり自分は教員に向いていないのでは?」と自信を無くすることも多々ありました。

そんな中でも唯一の救いは、ソフトテニスのクラブ指導(部員は40名位)をさせてもらったことでした。生徒と一緒に汗を流すことは楽しく、一緒になって練習することでクラブ生もよくついてきてくれ、放課後や休日のクラブ指導はとても充実して楽しかったものです。

そんな状態で3年目を迎えた化学の授業でしたが、今まで私語が多く勉強に関心を持たなかった生徒達が何故か説明をよく聞いてくれるようになり「藤井先生の授業はよくわかるよ。教え方がうまい」などと言ってくれるようになりました。それまでの2年間は授業中に「静かにしなさい、黒板を見なさい」と大きな声を出していましたが、3年目からはどのクラスに

行っても普通の声で授業が出来はじめ、生徒も前を向いて真剣に授業を受けてくれるようになりました。

自分自身、3年目から特に教え方を替えた訳ではないが、今から思えば2年間で知らず知らずの間に、教壇での立ち振る舞いや目くばり、生徒の様子を見ながら授業が出来るようになったのかな？と思います。そうすると授業で教室に行くのも楽しく余裕もでき始め？雑談もかなり折りまで手の授業もでき始め、自信もついてきたように思えました。そうすると生徒達もよくついてきてくれて「小テスト」や「丸暗記大作戦」などもゲーム性を取り込み、生徒達も頑張って勉強してくれるようになったと思います。

もし3年目も教壇に立って悩む日々が続いていたら私は教員を辞めていたかも知れません。昔からよく言われるように「石の上にも3年」とはこのことか、と自ら実感したものです。確かに人間には向き・不向きがあり、仕事には適性は絶対に必要なことだと思います。適性を欠く場合は、その仕事が苦痛となり楽しくなく苦痛を伴うことでしょう。そんな場合は早く見切りをつけ、自分の他の才能を生かせる職に就くべきだと思います。

こうして私は近大福山に就職し、今年で早44年。本当にあっという間の教員生活でした。振り返れば多くの人に支えられ励まされ、人生の岐路ではこれまた多くの恩師の適切なアドバイスを受け、考え、悩みましたが、この長きに渡り教員を続けてこられたことについては、本当に良かったなあと周りの方々や多くの人々に感謝の気持ちで一杯です。

教員生活は、多くの卒業生を世に送り出し、あちこちで活躍する姿や話を聞くと大変嬉しく、これがまさしく「教師冥利に尽きる」ということでしょうね。

また、これまで大きな病気やケガにもかかわらず健康で仕事が全う出来たことにも感謝の気持ち一杯で、忘れてはならないのは、家族の支えがあったお陰でこのように好きなことが出来、これまた感謝の気持ちで一杯です。

以上、このように私が進路目標を決めたのは少し遅かったと思いますが、自分の適性を見つけ出すため、色々な経験や体験を通じて多くの人と関わり、周りの人の意見にも耳を傾け、いろんな岐路では悩みながらも最終的には自分が判断を下す。それが正しかったかどうかは、全力で取り組んだ後に分かるはずだし、とにかくなつたからには目の前にあるものに全力で取り組む、そうすれば道も開け、これこそが人生ではないでしょうか。

そして、もう一つ教員になろうと決めた理由として、教師はその仕事の中に「喜・怒・哀・楽」があるということです。人間相手です。いつも神経をすり減らし、頭にくることや悲しい出来事も多々ありますが、日々の生徒とのかかわりの中で少しでも成長が見られた時や、生徒のさりげない一言が嬉しかったりする。それを味わうことが出来るのも教員ならではの思いです。仕事を通じてこんなに人として感情を毎日出させてくれる仕事は無いと思います。

そうかといって私が皆さんに紹介するような素晴らしい教育実践は、結局何もございせんが、感動的なものが大きかろうが小さかろうが、一瞬でも、一時でも味わえることがあるのも教師です。

教師は事務的なサラリーマンではありません。教員と保護者が一体となり、数多くのチー

ムワークで一人ずつの子ども達（生徒達）の成長と関わることが出来る,最高の職業だと思います.

どうか皆さん,教員を目指してください.本当に最高の職業ですよ.お勧めします.

以上

## 中学校教諭免許を取得した理由

山岡 愛

近畿大学附属広島高等学校・中学校福山校 教員  
(科目等履修生)

私は、中学校教諭免許を取得するため、1年半、高校教員をしながら科目等履修生として近畿大学工学部にお世話になりました。主に、化学分野・地学分野・教職についての講義を受講し、先進的な知識をたくさん学ばせて頂き、中学校教諭免許を取得することができました。高校教員と科目等履修生の両立は容易ではありませんでした。それでも、中学校教諭免許を取得したいと思った理由は2つあります。

1つ目は、教員という仕事をするうえで、中学校での教育経験が必要だと感じたからです。高等学校と中学校では異なることがいくつかあります。その1つが義務教育であるかどうかです。義務教育は、生徒が社会で生きていくために必要な基礎人間力を鍛えるものだと考えています。知識だけでなく、思考力・判断力・主体性などは、義務教育を含む中学校生活の影響を大きく受けると感じます。私自身も中学生時代に受けた教育が人格やその後の道を大きく変化させたと感じています。また、中学生でどのようなことを学び、経験しているのかを知っておくと、高校で教育する際に生徒の気持ちを想像しやすいのではないかと考えます。このように中学校教育は高校生やその後の人生に大きく関わっていき、中学校教育を知らずに高校生を理解し教育することはできないと思いました。したがって、中学校教員として実際の現場から学びたいと思い中学校教諭免許を取得しました。

2つ目の理由は、教員を続けたいと思ったからです。私が教員になった理由は、好きな教科を生徒に教えながら、教材研究を続けられると思ったからです。しかし、実際教員になってみると、教員の仕事は授業だけでなく、生徒指導、事務作業など、やることがたくさんありました。教員という職業は、世間で言われているよりもずっと過酷です。それでも私が教員を続けたいと思ったのは、授業でのやりがいや、生徒からもらう正のエネルギーが想像していた以上にあったからです。一生懸命つくった授業に興味関心を持ってくれたり、生徒が信頼し頼ってくれると、とても嬉しく、もっと頑張ろう、もっと勉強しようという活力が湧いてきます。また、生徒が心身ともに成長する姿や、できなかったことができるようになるのを身近で見ることができるのは教員の特権です。教員でなければ得られなかった経験、喜びがたくさんあり、これからも教員として成長し、生徒の教育に関わっていきたいと思いました。

以上の2つの理由から必ず中学校教諭免許を取りたいと思い、高校教員と科目等履修生を両立させました。私が無事中学校教諭免許を取得できたのも、近畿大学工学部の教職員の方々、関わってくれた学生の皆さんのおかげです。心から感謝申し上げます。教員になろうか迷っている学生の皆さん、是非教員になってみてください。教員でしか味わえない経験や想

いが必ずあります。そして、近畿大学工学部で学んだことを信じ、胸張って社会に踏み出して  
ください。微力ながら応援しています。

実際に、勉強が苦手な生徒に「いつから勉強が苦手なのか」と質問すると、「中学生から」  
と答える生徒がいます。

生徒の成長は私たち教員に莫大なエネルギーをくれます。

教育における知識や経験をより深めたいと思ったからです。

短い間ではありましたが、私にとって密度濃い時間を過ごさせて頂きました。ここでお礼  
申し上げます。

# 体験記



中学校（数学）

## 教育実習の報告

加藤 遼

（ロボティクス学科4年）

六月二十日から七月七日の約三週間、教育実習を行った。担当は一年生のクラスであった。短い間であったが多くの点で成長することができる三週間となった。

初めに、生徒のとの交流の面では、時間が経つにつれ徐々に深い交流を図ることができた。担当したクラスの生徒たちは、比較的大人しく、真面目な生徒が多いクラスである。そのため、話しかけても返事はしてくれるが、緊張もあってか反応は薄く、会話がうまく続かないことが多々あった。しかし、一週間、二週間と時間が過ぎるうちに生徒と私自身のお互いが環境に慣れ始め、休憩時間に腕相撲大会や、恋愛の話をするなど生徒のとの深い交流が積極的にできるようになった。それらを通じて、三週間経った時には、生徒一人一人の個性を短い時間なりに知ることができ、その個性に応じて、声のかける頻度やかけ方を変え、生徒に応じた接し方もすることができた。

授業においては、この実習で特に大きく成長することができた。二週目の終わりから実習最終日にかけて十二時間の授業で、単元は文字式の導入から文字式の表し方まで行った。初めの授業は黒板の書き方、時間配分、発問の仕方、生徒の様子の見方など多くの指摘をうけた。生徒の考えや生徒のわからないところをうまく拾えていない、勝手に進んでいく授業であったが、先生方の指導・助言から「生徒に戻す」ということを重視し、発問に対して生徒が考え、グループで話し合い、発表し、そこからさらに他のグループの意見を考慮して、自身のグループで改めて話し合い・確認する、「生徒が主体のなった授業」に徐々に近づくことができた。最初の授業と比較すると多少は満足できる授業を行うことができた。

また、教育実習で褒めていただけられることもあった。それは授業中や休憩時間の生徒に対する表情だ。特に意識をしていたわけではないが生徒と接する楽しさから自然と生徒の警戒心や緊張を解きやすい朗らかな表情となった。

今回の教育実習を通じて生徒理解の難しさや教員の仕事の忙しさなどまだまだ多くのこと学ぶことができた。その上で、教師としての職業のやりがい、短い時間なりに感じることもできた。生徒が様々なことに挑戦する姿や、生徒同士で楽しむ姿を見ることができ、生徒が私のもとに駆け寄って声をかけてくれることなどから、教員の楽しさと責任を感じ、改めて憧れである教師という職業に就けるよう日々努めたいと思う。

中学校（理科）

## 教育実習に行くことで

三村 悠人

（化学生命工学科4年）

まず、私が今回の教育実習を通して、感じたこととして、先生方はたくさんの情報を持ち、共有しているという点が印象的でした。その情報には、1週間、1ヶ月単位で生徒をどうしていくかやプラスの話、マイナスの話さまざまな種類がありました。その中で、先生方は生徒に伝えるべき情報と伝えないものとを区別したり、伝えることでも話し方を変えることで生徒にどう受け取ってほしい情報を考えていた点がとても工夫をされていて、真似をしたいと思いました。

次に、教員は授業を行い教えることだけではなく生徒指導を通して生徒の価値観や考え方を变えることもできるといったとても生徒たちにとって影響の大きな職業だと私は考えています。そこで、初任者の先生にお話を伺うと、生徒と過ごす中で、「教員がスキルアップをさせてあげるために信頼関係を築くことを1番大切にしている。」といわれました。また、そのためには、「話に一貫性を持たせることや日ごとに話を変えない」といった発言には、とても気を付けている印象的を受けて、教師の責任の大きさを感じたと同時に私のこの考えは常に感じながら生徒と接する必要があると感じました。また、とっさに生徒にどのような声をかけてあげるべきか考えていきたいと思いました。

研究授業では、観察実験を行いました。実験は指示が通りにくいことや活動時間を多くとってほしいので、説明のスピードが早くなってしまったという反省点が出てしまいました。

また、不登校支援の先生にお話を伺うと、「そうした生徒もいずれ卒業してしまう。そのため、生徒たちが最終的に自立就労ができるように教員ができることを考えなければならない。」と言われました。私は、目の前のこの生徒にはどうしようと考えていました。しかし、この言葉から、その後のビジョンを持たせて接することや卒業後の居場所づくりのことをあまり考えられていなかったことに気づかされました。

今回の実習で、さまざまな特徴をもった生徒がいる中で、それぞれの生徒が卒業後に困らないような、知識や考え方を教えていると言われたときにまだ、経験があまりない中学生に対してレベルアップを促すには、手立てや話し方はたくさんあると思うが、その方法が教員を目指している私にはまだ持っていないと感じました。そのため、生徒を指導する立場になることにおいて、そうした引き出しの量を増やしていきたいと思いました。最後に、生徒たちは、実習生を含めた教職員の態度や反応をよく見ていることを感じるほど観察していることに気づきました。また、学校に教員として生活している以上生徒の誰かは私を見ていて、お手本として真似してしまうことがあるので、いつ生徒が見て真似をされても大丈夫なように自覚をもって生活する必要があると感じました。

中学校（数学）

## 教育実習を終えて

堤 美羽

（電子情報工学科 4 年）

教育実習を終えてまず一番に思うのは、長いと思っていた3週間はあっという間だった。前日まではしんどい毎日が始まると不安と緊張で押し潰されそうだったが、確かに教員の業務の多さに驚きはしたものの、教員を志望している私にとってはその全てが自分の憧れだったもので非常に楽しくやりがいを感じながら過ごすことができた。また、それと同時にその忙しい仕事量の中で私たち教育実習生に多くの時間を割いてくださった担当の先生方には本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。

私は実習中の3週間、中学1年生の男子クラスを担当した。このクラスで日々を過ごす中で、教員は教育の直接の担い手であるということを改めて強く感じた。教育の本質とは、単なる知識や技能の伝達にとどまらず、教員と生徒との人格的な触れ合いにあり、それを通じて生徒の人生に大きな影響を与えるものである。そのため、確たる理念や責任感、生徒に対する愛情、専門的な知識、深い教養などが求められており、絶えず研究と人格の修養に努めなければならない。中学1年生の男子ともなると、落ち着きがなく話を聞いていないがために集合時間や提出物の期限を守れないことが多々あった。その度に担当の先生は「勉強は二の次でいいから人として守らなければいけないことは守れ。」と仰っていた。私はこういう指導こそが教育の本質であり、教員の使命だと思った。

実習期間中、私はせっかくの学校現場に携われる貴重な機会を1秒たりとも無駄にしないよう、可能な限り授業参観に行くことを心掛けていた。プロの先生方の授業からは学ぶことがたくさんあり、その学んだことを活かして授業実習に臨んだ。そして授業実習を終えた後はその度に来てくださった先生方に指導・助言を頂き、毎時間授業の精度を上げられるように務めた。特に、授業の中で「発問」は命となってくる。ただ、「発問」が内容を広く含むと、生徒は何を考えたら良いかを焦点化できず踏みとどまってしまう。しかし、だからといって「発問」を具体的にすれば良いというわけではなく、それは生徒の考える力を養う機会に制限をかけてしまうことになる。具体的な発問が良い場面と、あえてぼかす場面、授業をする際は指導者としてしっかりと意図を大切に、うまく使い分ける必要があるということを知った。

この実習期間で指導いただいたこと、全てを实践できたわけではない。生徒を相手に授業を行って初めて気付かされることもあった。拙い授業だったにも関わらず、生徒たちはちゃんと私を先生として接して慕ってくれた。そんな可愛い生徒たちがいたからこそ乗り越えられた3週間だった。この教育実習の得られた経験を活かして、これからも勉学に励んでいきたい。そして次は教員として学校現場に立てるよう努力していきたい。

## 介護等体験の反省

黄金井 健司

(電子情報工学科4年)

8月28日から、9月1日にかけての5日間、東広島市内の特別養護老人ホームにて介護等体験を行い、デイサービスという日帰りでの介護やこまめなレクリエーションなど幅広い体験をすることができた。今回の体験では、ほとんど初対面である3年生の後輩と2人で行われた。私は、体験を始めるにあたって目標を「責任感を持って5日間を過ごしきる」「多くの人と積極的に交流する」という2点を掲げた。

まず、一つ目の目標である「責任感を持って5日間を過ごす」というものだが、体験という名目はあるものの職員の一人としても働くことになるため、プロ意識をしっかりと持った対応を心がけたいという思いのもと立てたものだ。実際に、体験をしてみて今までやったことのないものが多く大変であったが、5日間を通して集中して取り組めたように思う。ただ、体験ということもあり自身で判断できない行動も多く、職員の手を煩わしてしまうことも多くあった。やりたいことをするには、ちゃんとした知識と経験が必要だが、5日間はあまりにも短いと感じられた。体験をする上での責任感はしっかりと持って5日間を過ごせたが、職員としての責任感を持つには業務量的にも時間的にも少し難しかった。

次に、2つ目の目標である「多くの人と積極的に交流する」だが、これは大学からの目標の一つでもある。5日間という短い期間のため、1つ目の目標よりもこの目標に重きを置いて過ごした。5日間で、担当職員も変わりつつ、様々な棟に赴き、交流をさせていただいた。担当職員の方たちも、隙間時間にはお年寄りの方との交流を手伝っていただき、いろいろな話をさせていただいた。5日目の総評にて、職員のみならずコミュニケーションについて、ほめていただいた旨を教えていただいた。2つ目の目標は達成できたといっていいだろう。

続いて、5日間でいただいた指導・助言について、振り返ろうと思う。5日間を通して、よく言われたことは介護する人によって合わせることである。介護のレベルが人によって変わるのももちろんのこと、個性があるため、声掛けの仕方や手伝う度合いも都度考えなくてはいけない。5日間食事の介助は、毎日行ったため、介助をする相手を慮ることは意識し続けた。また、手助けをしすぎないことも併せて教えていただいた。思い込みでできないと決めつけて、手助けをしすぎてしまうと相手のできることを狭めてしまうことにつながるということである。ほかにも、5日間様々なことを教えられ、考えさせられたが、多くのことはお年寄り相手だけでなく、普段のコミュニケーションでも行うべきことであるように思えた。そして、もちろんのことだが教師として生徒とのコミュニケーションでも意識すべきことでもある。改めてコミュニケーションの重要性を感じられる体験であった。これまで以上に、コミュニケーション能力を高めていきたい。

# 資料



## 令和5年度 教職課程行事報告

### 【学内説明会】

日時	時間	場所	対象	項目	内容
3月31日(金)	①14:00～15:00 ②15:30～16:30	近畿大学工学部 C305	2～4年	教職課程説明会	教職課程について
4月3日(月)	12:00～13:00	近畿大学工学部 C407	1年	教職課程説明会	教職課程について
4月17日(月)	12:20～13:00	近畿大学工学部 C305	介護等体験 希望3年	令和5年度介護 等体験説明会	介護等体験の代替措置について、社会福祉施設での体験申込について
4月21日(金)	12:20～13:00	近畿大学工学部 C305	3年	令和6年度教育 実習申込説明会	教育実習実施までの手続き、教育実習申込みと内諾について
4月24日(月)	12:20～13:00	近畿大学工学部 C305	4年 科目等履修生	令和5年度教育 実習事前説明会	教育実習における注意事項
7月10日(月)	12:20～13:00	近畿大学工学部 C206	介護等体験 希望3年	令和5年度介護 等体験事前説明会(社会福祉施設)	介護等体験(社会福祉施設)における注意事項
10月12日(木)	12:20～13:00	近畿大学工学部 C305	4年	教育職員免許状 申請手続き説明会	免許状授与申請について
12月2日(土)	13:10～18:00	近畿大学工学部 C305	3・4年 科目等履修生	教育実習報告会	令和5年度教育実習報告
12月8日(金)	12:20～13:00	近畿大学工学部 C305	2年	令和6年度介護 等体験申込説明会	介護等体験の説明と申込について

### 【学外での活動】

日時	場所	内容
4月22日(土)	広島文教大学	中国・四国地区私立大学教職課程研究連絡協議会研究協議会
5月20日(土)	TKPガーデンシティ仙台	全国私立大学教職課程協会研究大会
5月下旬～9月下旬	実習校(5校)	教育実習教育実習現場指導
11月18日(土)	中京大学 名古屋キャンパス	全国私立大学教職課程協会研究交流集会
12月2日(土)	広島文教大学	中国・四国地区私立大学教職課程研究連絡協議会研究協議会

### 【教職課程運営委員会】

日時	内容
4月4日(月)～6日(火) ※メール審議	令和5年度教職課程変更届について
5月11日(木)	副委員長の選出について

日時	内容
6月22日(木)	教職履修カルテについて・教員採用選考試験の早期化・複数回実施等について 教職課程ホームページについて・令和5年度教育実習実施状況 令和6年度教育実習申込状況について・教職課程自己点検評価について
7月27日(木)	介護等体験代替え学修の確認担当について 令和6年度教員採用試験の受験状況について 令和5年度自己点検評価報告書作成の手引きについて
9月28日(木)	令和5年度教職課程自己点検・評価について 教職課程の履修に関するアンケート(令和5年度)の実施について 令和6年度「教科に関する専門的事項」の科目変更について 赤穂市教育委員会との教育連携について 令和6年度教育実習参加予定者について
10月26日(木)～10月28日(土) ※メール審議	令和6年度学則変更(カリキュラム変更)(案)について
11月9日(木)	副委員長の選出について 令和6年度教職課程変更届(教科専門科目の見直しに伴う変更)について 教職課程アンケートの実施について、令和6年度教育実習参加予定者について
12月21日(木)	令和6年度教職課程スケジュールについて 令和6年度教職課程履修要項について 教育実習実施要領について 「大学生による学校支援活動」の協力校への参加について 令和5年度(令和4年度報告書)教職課程自己点検・評価報告書について
1月25日(木)	令和6年度教職課程変更届について 教育実習申請事前指導実施計画(案)について 教育実習事前面接指導実施計画(案)について

## 令和5年度 教職課程受講者数

(単位：人)

学科	学年		1年生	2年生	3年生	4年生	計
化学生命工学科	実人数		12	12	9	9	42
	内訳	理科(中)	7	11	7	6	31
		理科(高)	12	8	9	6	35
		技術	0	2	0	0	2
		工業	0	1	0	0	1
機械工学科	実人数		3	1	2	1	7
	内訳	技術	2	1	1	0	4
		工業	2	1	2	1	6
情報学科	実人数		3	5	3	2	13
	内訳	技術	1	2	0	0	3
		工業	0	1	0	0	1
		情報	2	4	3	2	11
建築学科	実人数		6	2	0	0	8
	内訳	技術	2	0	0	0	2
		工業	5	2	0	0	7
電子情報工学科	実人数		11	7	8	4	30
	内訳	数学(中)	7	3	4	3	17
		数学(高)	9	4	4	3	20
		技術	2	0	2	0	4
		工業	2	0	0	0	2
		情報	4	3	1	1	9
ロボティクス学科	実人数		5	5	0	6	16
	内訳	数学(中)	5	3	0	4	12
		数学(高)	5	3	0	4	12
		技術	0	1	0	0	1
		工業	0	0	0	1	1
合計	実人数		40	32	22	22	116

## 令和5年度 介護等体験・教育実習参加者数

### 【介護等体験】

特別支援教育総合研究所の印刷教材2科目（視覚障害児の教育課程及び指導法／聴覚障害児の教育課程及び指導法）を受講する代替え措置にて実施

(単位：人)

学科	聴覚障害児の教育課程と指導法	視覚障害児の教育課程と指導法	合計
化学生命工学科	4	3	7
機械工学科	1	0	1
情報学科	0	0	0
建築学科	0	0	0
電子情報工学科	2	5	7
ロボティクス学科	0	0	0
合計	7	8	15

また、社会福祉施設での介護等体験については希望者のみ実施

(単位：人)

学科	社会福祉施設
化学生命工学科	1
機械工学科	0
情報学科	0
建築学科	0
電子情報工学科	1
ロボティクス学科	0

### 【教育実習】

(単位：人)

学科	中学校	高等学校	中高一貫校	計
化学生命工学科	4	3	1	8
機械工学科	0	0	1	1
情報学科	0	1	1	2
建築学科	0	0	0	0
電子情報工学科	0	2	2	4
ロボティクス学科	2	4	0	6
合計	6	10	5	21

## 令和5年度 免許取得者数・教員就職者数

### 【一括申請による教員免許状取得状況】

(数字は取得人数)

教科・種類		学科						合計
		化学生命工 学科	機械工学科	情報学科	建築学科	電子情報工 学科	ロボティクス 学科	
数学	中学	-	-	-	-	3	3	6
	高校	-	-	-	-	3	3	6
理科	中学	6	-	-	-	-	-	6
	高校	8	-	-	-	-	-	8
技術	中学	0	0	0	0	0	0	0
情報	高校	-	-	2	-	1	0	3
工業	高校	0	1	0	0	0	1	2
合計	中学	6	0	0	0	3	3	12
	高校	8	1	2	0	4	4	19

### 【教員採用試験合格者・教員就職者数】

(既卒者は含まない)

教科・種類		学科	学科						合計
			化学生命工 工学科	機械工学科	情報学科	建築学科	電子情報工 工学科	ロボティクス 学科	
数学	中学	教採合格	-	-	-	-	0	0	0
		教員就職	-	-	-	-	0	1	1
	高校	教採合格	-	-	-	-	0	0	0
		教員就職	-	-	-	-	0	0	0
理科	中学	教採合格	1	-	-	-	-	0	1
		教員就職	3	-	-	-	-	0	3
	高校	教採合格	1	-	-	-	-	0	1
		教員就職	1	-	-	-	-	0	1
技術	中学	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
情報	高校	教採合格	-	-	2	-	-	0	2
		教員就職	-	-	2	-	-	0	2
工業	高校	教採合格	0	0	0	0	0	0	0
		教員就職	0	0	0	0	0	0	0
	中学	教採合格	1	0	0	0	0	0	1
		教員就職	3	0	0	0	0	1	4
	高校	教採合格	1	0	2	0	0	0	3
		教員就職	1	0	2	0	0	0	3



お知らせ



# 教職ラボ同好会

→教師を志す近畿大学工学部学生のサークル

人前に立つのは苦手…。  
でも、はきはき喋れるようになりたい！



入部動機は  
人それぞれ！

活動風景



教職課程に興味はあるけど…。  
よくわからないにや…。



地域のイベントに学生ボランティア  
として参加することもあります！

活動内容

- ・模擬授業
  - ・板書練習
  - ・自己分析
  - ・問題解説練習
  - ・教員採用試験対策
  - ・ボランティア活動
  - ・面接練習
- などなど…

それぞれの  
「強みを伸ばし」、  
「弱点を克服」  
できるよう  
自分たちで考案！

2025年度の活動

毎週土曜日 11:40-13:40

場所：C412

連絡先：kyoushokulabo.kindai@gmail.com ロボティクス学科 4年 白濱 まで！



令和7年1月30日 発行

**近畿大学工学部教職課程年報 Vol.11**

編集兼発行者 近 畿 大 学 工 学 部

〒739-2116 広島県東広島市高屋うめの辺1番

電話 (082)434-7006

Published by: Faculty of Engineering,  
Kindai University

Address: 1 Takayaumenobe, Higashihiroshima  
Hiroshima 739-2116, Japan  
Tel. (082)434-7006

# 11 Annual Report

2024 Vol.11

## CONTENTS

■ Practical Report .....	3
■ Contributed Article .....	13
■ Notes of the practical experience .....	23
■ Reports .....	29
■ Information .....	37

The Teacher Training Course  
in Faculty of Engineering, Kindai University